

デュレンマットの『フランク五世』

寺 島 政 子

I. はじめに

フリードリヒ・デュレンマット (Friedrich Dürrenmatt 1921-1990) はスイスを代表する劇作家であると同時に、戦後のドイツ演劇界に多大な貢献をした作家でもあった。彼は当時スイスに亡命していたドイツの名女優テレゼ・ギーゼ (Therese Giehse 1898-1975) に捧げるドラマを三作書いている。¹⁾ そのうち『老婦人故郷に帰る』(Der Besuch der alten Dame 1955) と『物理学者たち』(Die Physiker 1962) がデュレンマットの代表作として高い評価を得ているのに対し、『フランク五世』(Frank der Fünfte) は何度も書き直しを重ねたにもかかわらず、ついに批評家たちに好意を持って迎えられないことはなかった。

ここではこの不評の作品『フランク五世』を取り上げ、その不評の原因を探るとともに、この作品を読むキーワードとなる「自由」、「手段」、「目的」を中心にテーマについて考え、現代の視点から新たな読み方ができないものか探っていきたい。

最初にこの戯曲の内容について簡単にふれてみたい。

フランク五世はある民間銀行の五代目頭取で自称「善良な人間」。ところが実はその銀行は利益を得るためには詐欺から殺人に至るまで手段を選ばない犯罪者集団である。フランクは経営状態が思わしくない銀行を清算し、各自が第二の人生を歩む計画を立てる。手始めに新入社員を自分の身代わりにして死を装い、まんまと保険金を騙し取る。

計画は順調に運ぶかに見えたが、二千万フランを払わなければ銀行の実態を警察に密告するという脅迫状が届いてから歯車が狂い始める。自分たちの事情をあまりにも知りすぎている脅迫状の内容に皆が疑心暗鬼になる。

フランクとその妻オットーリエは脅迫者への支払いに充てるため、行員に各自の蓄えを出すように要求する。だがそれに逆って逃亡あるいは拒否した行員たちが次々に殺されていく。また罪の重さに耐えかねて心の平和を得ようとした行員たちも不穏分子と見なされて消されていく。

脅迫者が実はフランク夫妻が行員たちに存在を隠し続けてきた子供たちであることが明らかになると、子供たちを善良な市民にするべく最高の教育を受けさせていただきに、夫妻のショックは大きかった。オットーリエは子供たちのためにも銀行を潰してしまおうと大統領のもとへ赴き、自分たちの悪事を明らかにして裁きを求める。しかし大統領は負債の大きさ、犯罪の大きさゆえに社会に混乱が起るのを恐れ、銀行再建のための資金を提供する。

デュレンマットがこの作品を書き上げたのは1958年で、初演は翌年にチューリヒのシャウシュ

ピール・ハウスで行われた。この時の作品には「ある民間銀行のオペラ」(Oper einer Privatbank)という副題が付けられ、パウル・ブルクハルト (Paul Burkhardt) が曲を担当した。初演の結果は二人の期待に反して惨憺たるものであった。批評家たちの意見は、『フランク五世』はブレヒト (Bertolt Brecht 1898-1956) の模倣にすぎないというもので、これはブレヒトが1928年に発表した『三文オペラ』(Die Dreigroschenoper) を念頭においたものだった。

デュレンマットはもともと書き直しの多い作家でもあり、デュレンマット研究においてはそれぞれの改訂版の比較研究ということも盛んに行われているほどだが、チューリヒでの酷評の後、ミュンヘン、フランクフルトと続く公演も失敗に終わったため、1960年にはさっそく最初の書き直しを行っている。²⁾ 続いて1963年に予定されていたボーフムでの公演のために二回目の書き直しをし、³⁾ それが翌年に Arch 社より出版されたが、この時デュレンマットは副題を「ある民間銀行のオペラ」から「ある民間銀行の喜劇」(Komödie einer Privatbank) へと変更した。『三文オペラ』を連想させる「オペラ」という言葉を削ったのは、もちろんブレヒトの模倣という評を避けたいという思いがあったからである。その後も三回書き直し、1980年に出版された「最終版」まで合計五回の書き直しを重ねたことになる。⁴⁾

II. 『三文オペラ』と『フランク五世』

『フランク五世』の不評は先に述べたように、ブレヒトの模倣という烙印を押されたためだが、デュレンマットもこの評判にただ黙って耐えていたわけではない。1960年に出版されたテキストの巻末に書いた『演出のガイドライン』では「この作品はシェイクスピアの現代版として演出すべきであり、ブレヒトと結びつけて演出すべきではない」と述べて、ブレヒト作品との関わりを否定している。⁵⁾ また1963年には『フランク五世の批評家たちへ』と題して行った講演で、自分自身が「作家としてではなく批評家として」自作の解釈を試みている。⁶⁾

デュレンマット自身はブレヒトの影響を否定しているわけであるが、批評家たちがそれでも「模倣」というレッテルを貼り続けたのにも、無理からぬ理由がある。両作品にははっきりとした類似点はいくつかあるからである。それではまずそれをみていこう。

『三文オペラ』は警視總監を友人に持つ盗賊団の首領と、その主人公と恋に落ちた娘を取り戻して主人公を絞首台送りにしようとするロンドンの乞食の総元締め、それに売春婦たちがからんで繰り広げられる物語である。これに対して『フランク五世』の登場人物たちも表向きは銀行員だが、裏に回れば詐欺や売春、殺人まで行う犯罪者集団である。つまり二つの作品の登場人物たちは社会的にはアウトローといえる存在である。

また両作品とも、一方はタイトルに他方は書き直しするまでは副題に「オペラ」という言葉があるように、劇中に多くの歌が挿入されている。⁷⁾ そして『三文オペラ』では各景のタイトルを幻灯でパネルに映し出すように指示されているが、『フランク五世』でも銀行の正面玄関に掛けられた黒幕に各景のタイトルが映し出されるようになっている。これはブレヒトが、観客が舞台と距離を置く叙事的演劇の重要な手法として提唱したものである。

そして特に印象的なのは『三文オペラ』でも『フランク五世』でも、前者はハッピーエンド、後者は悲劇的な結末という違いはあるものの、両者とも急展開のなんとなく腑に落ちない、あっけない幕切れとなることである。『三文オペラ』では、主人公マクヒースが捉えられて絞首台に上ろうとする

その寸前に女王の使者が登場し、恩赦が下されたことを告げる。『フランク五世』でも、悪行を告白して裁きを求めるオッティーリエに対し、大統領が罪を問わず、小切手を与えて銀行を援助する。

デュレンマット自身がいかにブレヒトからの影響を否定しても、戦後のドイツ演劇が、どのような形にせよその影響を受けずに済むものとは思えない。『フランク五世』の6景で銀行の支配人ベックマンも観客に対し、自分たちの仕事について長々と演説する場面で、「我々は残念ながら法治国家に暮しているんです。……(略)……だから買収された経済大臣も警視総監も登場させることはできません。会計士でさえ買収できないんですから…」(36)と語っている。この「買収された警視総監」というのは明らかに『三文オペラ』に登場するマクヒースの友人ブラウンを指しているものであり、⁸⁾このことはデュレンマットがこの作品を書いた時にブレヒトを意識していたということを示していると言える。

以上述べてきたように、多くの批評家たちの見解にも、それなりの根拠があることは否定できない。しかしだからと言って、『フランク五世』が「ブレヒトの模倣」だと簡単に片付けても良いものだろうか。80年代に入ってようやくヘルプリンクが、『フランク五世』のテーマをアクチュアリティのあるものとして取り上げ、肯定的な評価を下している。⁹⁾

『三文オペラ』の登場人物はアウトローだが、彼らが演じるものはブルジョワジーの生活やモラルであり、作品はそういう当時のブルジョワジーの生活態度に対する痛烈な批判となっている。だが『フランク五世』でテーマとなっているのは、集団の中における個人の行動の自由とそれに対する責任の問題である。この問題を示しているのが、13景で瀕死の支配人ベックマンをフランクが見舞うシーンである。ベックマンはこれまでの罪を懺悔して安らかに死んでいこうと、神父が来るのを心待ちにしている。そこに死を偽装してからというもの、正体がばれないように神父に変装して暮しているフランクがやって来る。

ベックマン「私を親友だというくせに、神父を装ってやって来るんだからな」

フランク「ベックマン、正体がばれてはまずいんだよ。そんなことになったら我々はみんな一卷の終わりだからね」

ベックマン「我々は一巻の終わり…俺は終わるんだよ、君が変装しようとしまいとね、偽神父さん。君はその変装も、我々の犯罪もみんな避けられないものだと思っている。避けられないものなんて何もなかったんだよ、偽神父さん、ほんのちっぽけなごまかしにしたって、殺人一つにしたって」

フランク(枕元に座って)「そりゃないよ、ベックマン。他にやり様がなかったじゃないか。引き継いだものがあまりにもひどかったんだ。君も知ってるじゃないか、我々の先祖がどんなにひどいことをしてきたか。人殺しや詐欺を続ける他に道はなかったじゃないか。引き返すことなんかできない相談だった」

ベックマン(フランクの衣装に掴みかかる)「嘘だ。引き返すことはいつだってできたんだ。この悪事を重ねた人生のどんな時だって。拒否できない遺産なんてありゃしないし、しなきゃならない犯罪なんてないんだよ。我々は自由だったんだ、偽神父さん、自由に創造され、自由に委ねられていたんだ！(再び崩れるように倒れる)僕の死の床から離れてくれ、フランクの亡霊よ、また墓の中へ戻ってくれ、じきにモーザー神父が来るだろう」(91f.)

意思に反してしなければならないことなどはないとベックマンは言いきる。「他に道はない」というのは言い訳であり、拒否する自由があるのだから、選択したのも自分の自由意思である。そしてそこには当然それを選択した責任が生じるのである。それでは次にこのテーマをデュレンマットがどのように扱っているかをみていこう。

Ⅲ.「自由」と「恐怖」

フランク銀行の行員たちは自分たちの犯罪をどのように考えていたのだろうか。4景では新入りの一人ハイニーがフランクの身代わりに殺されたことが明らかになり、もう一人の新入りポイリーがギヤング銀行の仲間として迎えられる。この景の最後で全員が次のように歌う。

俺たちはしているだけだ、しなきゃならないから、
いいことがしたいのに。でもいい暮しがしたいから、
仕事をしなきゃならない。 (25)

つまり悪いことをしているという自覚はあり、そしてそれをするのは「いい暮らしをするため」と理由づけている。だがもちろん「いい暮らし」をするために犯罪を「しなきゃならない」という必然性はどこにもなく、それは単なる言い逃れにすぎない。

また行員たちはそれぞれ、犯した罪により、良心の呵責にさいなまれてもいる。11景でポイリーが二人を殺したために不眠に苦しんでいると訴えた時、他の行員たちはそのささいな代償を笑い飛ばし、次々に自分の犯罪と代償を半ば得意げに披露する。オットーリエはモルヒネ中毒、カペラーは腸閉塞、エグリは心筋梗塞、フリーダは電気ショック、シュマルツは不能、ベックマンは癌。また、すでに危険分子として殺されてしまったヘーバリンは心の安らぎを得るために教会へ行ったり、刑務所生活を望んだりするようになっていた。

つまり彼らは恐ろしい犯罪を重ねてはいるが、冷酷無比の犯罪者でもなんでもない、いわば普通の人間なのである。それでは「いい暮らし」をするために「しなきゃならない」と誤魔化しながら、体を蝕まれても、ベックマンが言うように「いつでも引き返す」自由があるのに、それをしないのはどうしてだろうか。同じ景で全員が次のように歌っている。

自由はすてきた、ああ、そんなことは俺たちはみんな知っている
けどつかもうとすると、自由はたちどころに消えてしまう
うまい餌にありついているやつは、罠の中にいるようなもんだ
そこから逃げ出そうとすると、罠が音を立てる (82f.)

つまり、悪事によって利益を得ている自分たちは罠の中にいるようなもので、そこから抜けようとするれば罠にかかってしまう、自分たちには引き返す自由はないというわけだ。実際、悪事を告白しようとしたヘーバリンやベックマンは殺害されたし、脅迫者への支払いのため、自分たちの蓄えを銀行に提供するように求められたとき、それに反する行動をとったフリーダ、カペラー、シュマルツも殺された。罠にかかってしまうという恐怖から、殺されてしまうという恐怖から、罠から抜け出ることができないという理屈は当然のことのように思われる。だが果たして本当にそうだろうか。犯罪という道を選んだ自分の責任を回避しているだけではないだろうか。

ゲーテやメーリケを愛読するインテリで、一見気の弱そうなフランクは、普通の人間である他の登場人物とは違ったタイプの人間だといえる。¹⁰⁾ それがよく表われている箇所を引用してみよう。

(右のドアをノックする音)

フランク「掃除婦だ」

オットーリエ「エミーに見つけれたら、何もかもおしまいよ」

フランク「すぐに殺せ！」

オットーリエ「殺せですって。いっつも私に殺せというのね。一度くらい自分でやってみれば」

フランク「僕にはできないよ、オットーリエ、できないよ」

オットーリエ「その上掃除婦なんだから、近頃じゃあなかなかいないのに」

フランク「しょうがないさ」

オットーリエ「隣の部屋へ行ってよ」

フランク「そんなことしても無駄だよ、声が聞かれちゃったんだから。絞め殺しておくれ、
ああ可哀相な、可哀相なエミー」 (63)

フランクは自分では「殺せない」と言うくせに、他人にはためらわずに「殺せ」と命令する。また何かちょっと面倒なことがあると、すぐ殺人で解決しようとする。「そんなことは無駄だ」と他の解決方法を考えようとはしない。そして嫌なことをするのは「いっつも」妻のオットーリエの役である。手遅れの癌を宣告されたベックマンが、そのことを知りながら、ただの胃痛だと自分を騙し続けたフランク夫妻に説明を求めるシーンでも同じである。

フランク「しょうがない、オットーリエ、話してやれ」

オットーリエ「いっつも、私」

フランク「僕にはできないんだよ。ベックマンは一番の親友なんだから。僕のたった一人の友達なんだ」

オットーリエ (言葉を選んで)「ベックマン、シュローベルク先生は、シュローベルク先生はね、私たちに2年前に…」

ベックマン「2年前に？」

オットーリエ「すぐに手術をするようにって言われたの。でも私たちは怖かったのよ」

ベックマン「何が怖かったんだ？」

オットーリエ「ベックマン、私たちは怖かったのよ、麻酔をかけられたらあなたが何か洩らすんじゃないかって…シュローベルク先生がご自身が執刀なさるわけじゃあないから、あなたを別の病院へ入れなければならなかったわけだけど、それをする勇気がなかったの」

ベックマン「君たちは怖かったから、俺を見殺しにするってわけだ」

フランク「ベックマン、僕は…」

ベックマン「怖かったから。俺たちがすること全て、怖かったからやっているんだ。発覚するのが怖かったから、刑務所暮らしが怖かったから…そしてその結果、突然俺の目の前に死が迫り、突然恐怖の虜になったっていうわけだ」 (65f.)

ここでもオットーリエは損な役回りである。フランクはベックマンを「一番の親友」だと言いながら、その親友を平気で見殺しにしようとしている。そして正面切ってそのことを問い詰められると、全て妻のオットーリエに押しつける。「可哀相」とか「親友」とか口にするくせに、彼の考え方はあくまでも身勝手である。その上、決して自分の手は汚そうとしない。表面は愛や平和や文学を語り、「善良な人間」を自称しているが、内面はやさしさのかけらもない、犯罪を躊躇しない冷酷で危険な人物である。フランクは行員たちが持病を訴えた時、「そんな些細なこと！……（略）……銀行業務が私を氷のようにしてしまった。おまえたちは体を病んでいるだけだが、私は心を病んでいるんだ」（82）と歌っているが、「心を病んでいる」人間らしい感情の麻痺してしまった人物が権力を持つというのはよくあることとはいえ、恐ろしい事実である。

またここでベックマンは「俺たちがやっていることは全て、怖かったからやっているんだ」と語っている。だがこの台詞は先の行員たちの言い逃れを肯定しているわけではなく、それを否定しているのである。つまり当然のことのよう「恐怖」を自分たちの行動の理由としているが、それがいかにばかげたことだったか、単なる言い訳にすぎなかったか、死に直面したベックマンは悟ったのである。また、「恐怖」を理由にベックマンを見殺しにしたフランク夫妻の行動がいかに理不尽なものが印象付けられることで、「恐怖」ゆえに「罨」からのがれられないのはしかたがないという論理も成り立たないことが明白になる。

エグリとポイリーを除く行員たちは、それぞれ銀行ぐるみの犯罪という罨から抜け出そうとするが、結局みんな殺されてしまう。あたかも、犯罪に加担することはしかたがないといっているかのようだが、そうではない。というのは、行員たちが罨から抜け出そうとしたのは、自分たちの行為を反省して犯罪に加担しない自由を選んだからではないからである。つまり罨の中においしい餌がなくなったので、もはや罨の中にいるメリットがなくなったので、あるいはすでに得た利益まで奪われそうになったので、彼らは抜け出そうとしたのである。彼らが死を迎えたのは引き返そうとしたからというよりも、しかたがないといいながら、引き返さずに抜き差しならぬところまで犯罪に加担し続けた結果であると言っても過言ではないだろう。

Ⅳ.「目的」と「手段」

この作品の登場人物は「いい暮らし」という目的のために「犯罪」という手段を用いているわけだが、その「いい暮らし」というものの多くが子供と結びついている。カペラーは恋人に子供ができたので結婚しようとしてエグリに反対される。ベックマンは自分の子供は諦めているが、孤児院を作るのが夢で、彼にとって子供は「最高のもの、最も純粋で、最も汚れなき者」（67）である。フリーダはエグリと結婚して子供を産むのが望みで、ベビーウェアを編むのに余念がない。そしてフランク夫妻には行員たちには秘密にしているが、すでに子供が二人いる。息子はオックスフォードで学び、娘はモントルーで教育を受けており、夫妻は週末や休暇にボーデン湖畔の家で何も知らない子供たちと「幸せな家庭生活」を営んでいる。フランクは「全ては子供たちのためにしたことだ」といい、オットーリエは「子供たちは自分のような人生は歩まず、清く正しい人間になるように」と願う。（67）

しかしこの作品では彼らの「目的」は一つも達成されていない。カペラーもベックマンも殺されてしまうし、フリーダも一緒に逃げてくれると思った恋人のエグリが銀行側にたち、恋人の手によって非情にも命を絶たれる。またフランク夫妻は脅迫者が自分たちの子供たちだったことを知って愕然と

する。その上、エグリがフリーダの代わりに売春婦として新たに採用したのは娘のフランツィスカだった。子供たちはフランクの日記によって真実を知り、親を追い出して自分たちが銀行経営をすべく乗り込んでくる。子供たちのために銀行を潰さなければというオッティーリエの決心も空しく、裁きを求められた大統領は銀行を存続させる道を選ぶ。

このデュレンマット得意の「起り得る最悪のどんでん返し」に関しては、モントルーやオックスフォードで最高の教育を受けていた子供たちが、一人前のならず者になっているのはつじつまが合わないという批判もあった。しかしフランク夫妻は自分たちは悪事に手を染める一方で、子供たちをいかにりっぱな学校に隔離しようとも、他人任せの教育をしていたのだから、これは納得のいく結果といえよう。旧版では最後にフランクさえも息子のヘルベルトから殺されるということになっていたが、新版ではそのシーンが削られている。そしてその代わりに、事実を知った夫妻の死を暗示させる場面がある。

オッティーリエ「これからどこへいきましょうか？」

フランク「わからないよ。ぼくらは無一文さ」

オッティーリエ「かなりね」

(沈黙)

フランク「姿を隠そうよ」

オッティーリエ「姿を消しましょう」 (128)

またエグリは「子供」ではなく、あくまでも「権力」志向で、最後まで銀行に忠実であったが、その結末も、銀行の世代交代で、人事部長からただの管理人に格下げされてしまうという悲劇的なものである。

このドラマの登場人物は「目的」のためには「手段」を選ばなかったわけだが、彼らが最後にそのしっぺ返しを受けたことは、どんな「目的」であっても「手段」を正当化することはできないということを表わしている。それを如実に示しているのが、銀行がペテンにかけようとした相手が、偶然から多大な利益を得たという、どんでん返しの二つのエピソードである。

一つはウラン鉱と偽って何の価値もない鉱山の債券を売りつけられた時計工場主ピアジェの話で、鉱山から本当にウランが発掘されて、彼は大金持ちになる。狂喜するピアジェだが、すでに放射能に冒されていて明日をも知れぬ命である。もう一つはホテル経営者シュトイリー夫人の話で、銀行は後でそれをネタにして脅迫しようと、彼女に保険金詐欺をもちかける。しかし故意に彼女のホテルを爆破する前に、本当に雷が落ちてホテルが全焼してしまう。シュトイリー夫人は正当に多額の保険金を受け取って大喜びだが、重傷を負って車椅子にさせられている。

この極端な二人の例を見ると、目的に至った成り行きがあまりにもばかばかしくて笑ってしまうが、いうまでもなく、大金を得るという目的は達成されても、それを達成した手段によって命を危うくしたのは全く意味がない。それにもかかわらず大喜びする二人には、何のための目的かを忘れた浅ましい人間の姿がある。目的を達成するには手段を選ばなくてはならない、そしてそれはフランク銀行の行員たちにも当てはまることである。

V. ま と め

デュレンマットの『フランク五世』は発表当時から「ブレヒトの模倣」という烙印を押され、不評を買っていた。この作品に見られるいくつかの類似点と当時の演劇界におけるブレヒトの影響力を考えると、それにも無理からぬ一面がある。しかしこの作品にも、悲劇的な結末をグロテスクな手法を用いて喜劇に転換するというデュレンマットらしさが、随所に生きている。¹¹⁾そして何よりも、『フランク五世』が掲げる集団における個人の行動の自由と責任というテーマは、『三文オペラ』のブルジョワジー批判というテーマよりも現代においてはアクトアルなものである。さらに言えば、いつの時代においてもアクトアルな、普遍性を持つものである。管理人に格下げされたエグリもフィナーレで次のように歌っている。

そうしたら、みなさん、
また裁きの時です
我々のように権力システムの中に暮し、
殺人者の論理で、自分で自分を騙している全ての人にとって
ここであれ、あそこであれ、どこであれ
人や時や場所の名前は気分次第で書きかえてかまわない
残念ながらどうしたって同じことになるんです
…… (略) …… (129)

つまりこの作品はいつの時代の、どこにいる、誰にでも当てはまる話であり、繰り返される話なのである。「権力システム」といっても、何も会社や団体などの大きな組織だけを想定する必要は全くない。小学生のグループにも、主婦のグループにも当てはまる話なのである。

註

- ¹⁾ いずれの作品でも老齢の女性が重要な役をになっており、彼女が演じている。
- ²⁾ この時のものが „Frank der Fünfte. Oper einer Privatbank“ として、同年 Arch 社より、最初のテキストとして出版された。
- ³⁾ この公演はデュレンマットと演出家の意見が対立して中止となった。原因は、劇中で死を前にして罪の懺悔をしようとする人物が殺されてしまうというシーンを、演出家が非キリスト教的だとして省略したことで、その後しばらくの間デュレンマットはこの作品の上演を差し止めた。
- ⁴⁾ 以下本文における引用は全て次の最終版からの拙訳である。
Friedrich Dürrenmatt: Frank der Fünfte. Komödie einer Privatbank. Neufassung 1980.
Zürich 1988. また引用箇所は () 内にそのページのみを記す。
- ⁵⁾ Vgl. Friedrich Dürrenmatt: Die Richtlinien der Regie. In: Friedrich Dürrenmatt, Frank der Fünfte. Komödie einer Privatbank. Neufassung 1980. Zürich 1988, S.153–155.
- ⁶⁾ Vgl. Friedrich Dürrenmatt: An die Kritiker. >Franks des Fünften<. In: Dürrenmatt, a.a.O. S. 160–167.
- ⁷⁾ デュレンマットは上記の『フランク五世の批評家たちへ』で、ブレヒトの登場人物は歌で本心を語るが、自分の登場人物は歌で言い逃れをするとその違いを強調している。

- 8) 警視総監ブラウンは盗賊マクヒースの友人で、賄賂を受け取り、マクヒースの犯罪を見てみぬふりしている。
- 9) Vgl. Robert E. Helbling: „Frank der Fünfte“: Eine kritische Bilanz der Gangsterbank nach über zwanzig Jahren. In: Zu Friedrich Dürrenmatt, Hrsg. von Armin Arnold, Stuttgart 1982, S.85–96.
この論文の中でヘルプリンクはオペラ形式に関しても、プレヒトの真似ではなく、デュレンマットの初期の作品にすでにその兆候が見られると擁護している。
- 10) これについてはデュレンマットも『フランク五世の批評家たちへ』で「実際には最も恐るべき人物」と述べている。
Vgl. Friedrich Dürrenmatt: An die Kritiker >Franks des Fünften<. In: Dürrenmatt, a.a.O.S. 164.
- 11) Vgl. 増本浩子: 迷宮のドラマトゥルギー——フリードリヒ・デュレンマットの喜劇 三修社 1998年。

参考資料

- Bertolt Brecht: Anmerkungen zur Dreigroschenoper. In: Die Dreigroschenoper, Leipzig 1964, S.89–100.
- Bertolt Brecht: Die Dreigroschenoper. In: Bertolt Brecht, Werke, Bd.2. Hrsg.v. W. Hecht, J. Knopf, W. Mittenzwei, K. -D. Müller. Berlin und Weimar 1993.
- Friedrich Dürrenmatt: An die Kritiker >Franks des Fünften<. In: Friedrich Dürrenmatt, Frank der Fünfte. Komödie einer Privatbank. Neufassung 1980. Zürich 1988, S.160–167.
- Friedrich Dürrenmatt: Die Richtlinien der Regie. In: Dürrenmatt, a.a.O. S.153–155.
- Wilhelm Große: Frank der Fünfte. In: W.Große, Friedrich Dürrenmatt, Stuttgart 1998, S.79–84.
- Robert E. Helbling: „Frank der Fünfte“ : Eine kritische Bilanz der Gangsterbank nach über zwanzig Jahren. In: Zu Friedrich Dürrenmatt, Hrsg. von Armin Arnold, Stuttgart 1982, S.85–96.
- Hugo Loetscher: Frank V. – Oper einer Privatbank. In: Über Friedrich Dürrenmatt. Hrsg.v. Daniel Keel, Zürich 1980, S.130–138.
- 増本浩子: 迷宮のドラマトゥルギー——フリードリヒ・デュレンマットの喜劇 三修社 1998年。

(てらしま まさこ 総合教育センター)